

大麦管理情報 (第7号)

令和6年3月28日
農業技術課広域普及指導センター

1 気象経過

- ・ 3月中旬は平年に比べ、平均気温は7.4℃（平年差+0.4℃）と並、降水量は55.0mm（平年比105%）と並、全天日射量は11.7MJ/m²/日（同96%）と並であった。
- ・ 3月5半旬は平年に比べ、平均気温は6.8℃（同-1.0℃）と並、降水量は13.5mm（同50%）と少なく、全天日射量は11.8MJ/m²/日（同91%）と並であった。

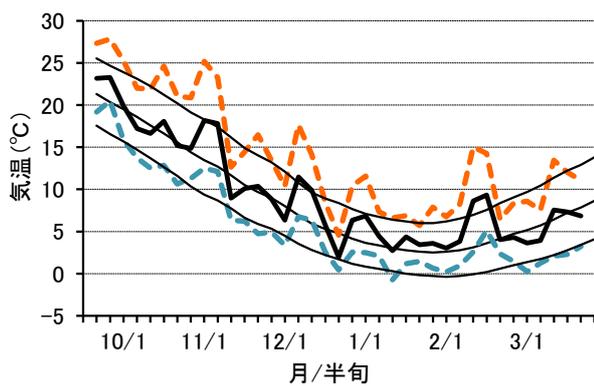


図1 気温の推移 (富山地方気象台)

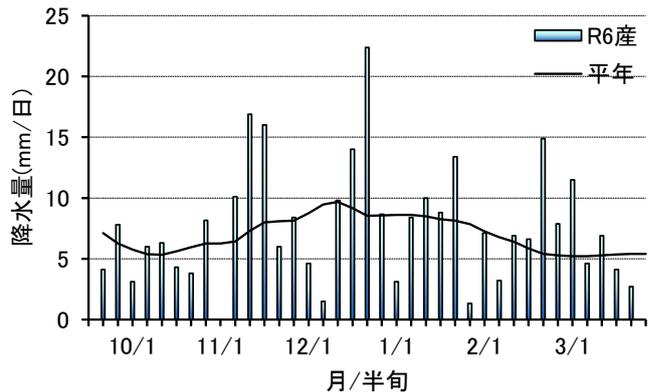


図2 降水量の推移 (富山地方気象台)

2 生育概況

- ・ 平年に比べ、草丈は並（平年比96%）、茎数はやや少なく（同91%）、葉齢の展開は早く（平年差+0.9葉）、葉色はやや淡く（同-0.7）なっている。また、幼穂長は1.7cmと平年並となっている。
- ・ 今後、気温が平年並で推移した場合、出穂期は平均で4月15日頃と予想される。

表1 大麦の生育状況 (3月28日)

年産	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂長 (cm)
		(本/株)	(本/m ²)			
R6産	32.4	3.8	589	12.9	42.5	1.7
R5産	52.8	3.5	576	13.4	43.2	3.4
平年	33.8	3.7	648	12.0	43.2	1.8

注) 調査は場数: 10、播種様式は全てドリル播き、平年はH26~R5年産の平均値

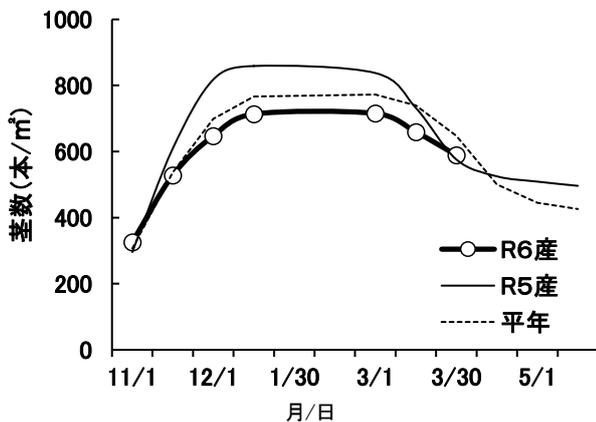


図3 茎数の推移

注) 平年はH26~R5年産の平均値

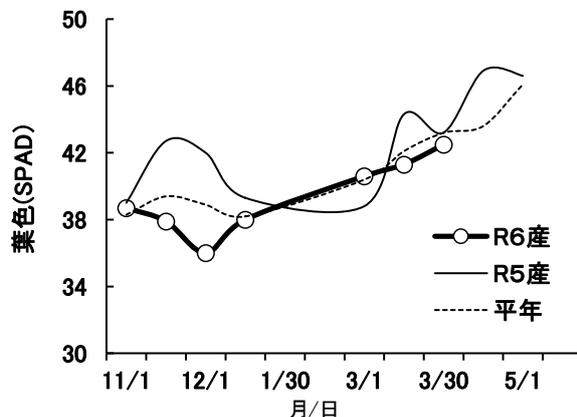


図4 葉色の推移

注) 平年はH26~R5年産の平均値

表2 幼穂長に基づく止葉展開期と出穂期の予測日

年産	幼穂長 (3/28 : cm)	止葉展開期 (月/日)	出穂期 (月/日)	今後の気温が平年より高く 推移した場合の出穂期の予測日		
				平年差	+1℃	+2℃
R6産	1.7 (0.9~2.7)	4/4 (3/30~4/8)	4/15 (4/10~19)		4/14 (4/9~17)	4/13 (4/7~16)
R5産	3.4 (2.0~4.3)	3/28 (3/24~4/2)	4/9 (4/5~12)			
平年	1.8	4/5	4/16			

注1) R6産は、今後の気温が平年並(H26~R5)に推移する場合の予測日(H18年農研の予測式を用いて、幼穂長から算出)

注2) ()内は、幼穂長及び生育ステージの予測日の幅を示す。

注3) 平年はH26~R5産の平均値

3 当面の技術対策

(1) 排水対策

- ・ 出穂後の登熟条件を良好にするため、再度、**排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底**し、根の健全化を図る。
- ・ 水稻作業が始まると用水や隣接田からの漏水の可能性があるので、水口や畦畔を点検し、湿害を確実に回避する。



図5 隣接田から漏水しているほ場

(2) 止葉展開期追肥

ア 肥効調節型基肥栽培

- ・ 肥料成分の溶出が登熟後半まで続くため、**追肥は行わない**。

イ 分施肥栽培

- ・ まもなく止葉展開期を迎えるため、遅れずに追肥を施用する。また、過剰に施用した場合、硝子率が高くなることから、**生育量に応じて適正に施用**する。

表3 止葉展開期の生育と追肥量の目安

葉色 葉色板	予想穂数 (m ² 当たり)	窒素追肥量 (10a当たり)
5未満	500本未満	2kg
	500本以上	1~2kg
5以上	500本未満	1kg
	500本以上	追肥しない

注) 葉色板の5はSPAD値で「45」

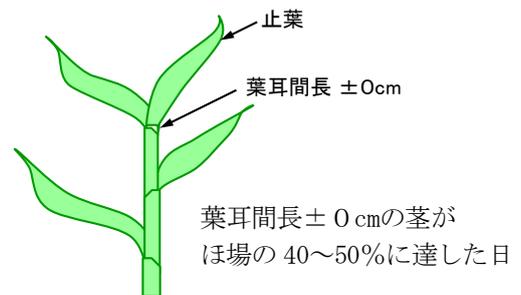


図6 止葉展開期

(3) 赤かび防除の徹底

- ・ 出穂期は、生育観測ほの平均で4月15日頃になると予想されるが、今後の気温が高く推移すると早くなることから、防除が遅れないように事前準備を進める。なお、**地域やほ場による生育ステージの差が大きいことから、必ずほ場ごとの出穂状況を見極め、最も効果的な防除時期である穂揃期(開花始め)とその7日後の2回防除を、晴れ間を利用して、確実に実施する**。
- ・ 防除効果は液剤の方が高いため、**特に1回目の防除は、可能な限り液剤を使用し、規定量の薬剤が確実に付着するように散布する**。
- ・ 防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。
- ・ 無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。

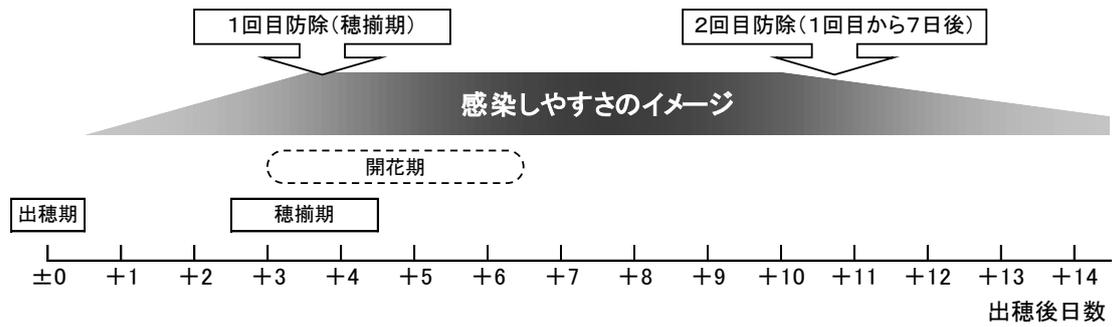


図7 赤かび病の感染しやすさのイメージ

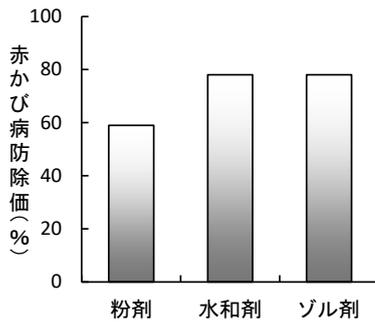


図8 トップジンMの剤型による防除効果の違い
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

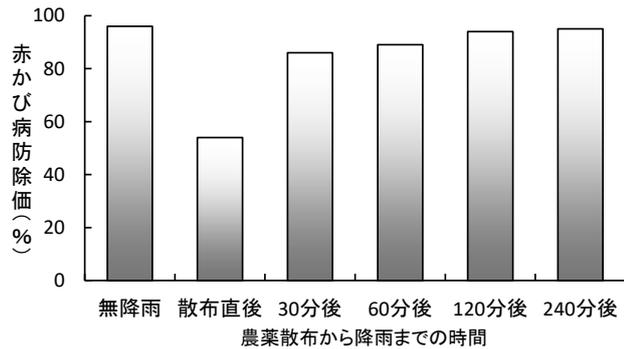


図9 農薬散布から降雨までの時間の影響

注) 防除薬剤：トップジンM水和剤
降雨は強い雨(25 mm/h)を2時間継続して実施
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

表4 赤かび病の防除薬剤

防除時期	剤型	薬剤名	希釈倍数(倍)	10a当たり散布量	使用時期 (収穫何日前まで)	使用回数	RACコード ※3
1回目: 穂揃期 (開花始め)	粉剤	トップジンM粉剤DL	—	4 kg	14日	3回以内※2	1
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3	3、DMI
2回目: 1回目から 7日後	液剤	トップジンM水和剤	1,000~1,500	150 L	30日	3回以内※2	1
		トップジンMゾル※1	1,500	150	14	3※2	
		シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2	3、DMI
		チルト乳剤25	1,000~2,000	150	21	1	
	ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3	7	
	ストロビーフロアブル	2,000~3,000	150	14	3		
	ミラビスフロアブル	1,500~2,000	150	14	2		
(無人航空機による散布)	(無人航空機による散布)	トップジンMゾル※1	8	0.8 L	21日	3回以内※2	1
		シルバキュアフロアブル	16	0.8	14	2	3、DMI
		チルト乳剤25	8	0.8	21	1	
		ワークアップフロアブル	10~16	0.8	7	3	

- ※1 取扱メーカーによっては、適用がないので注意する。
- ※2 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む。
- ※3 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、2回目は異なる系統の薬剤を使用する。QoI剤は1作期1回までの使用とする。DMI剤は出穂後の赤かび病防除2回のうち1回までの使用とする。